

研究ノート

公共空間で心のケアを提供する宗教者の養成について

——教師教育プログラムへの反響——

鈴木智雄

「宗報」(令和元年八月号)へ掲載の通り、様々な宗門大学では、大学院教育や特別な講座として臨床宗教師養成研修を行っている。それらは基本的に、各宗派・教派で教師資格を取得した者が、志願して学ぶことが出来る形となっている。今一度、臨床宗教師の養成プログラムの認定を受けている機関を示すと、

東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座

東北大学大学院文学研究科死生学・実践宗教学専攻分野

龍谷大学大学院実践真宗学研究科

高野山大学密教実践センター

種智院大学臨床密教センター

武蔵野大学臨床宗教師・臨床傾聴士養成講座

愛知学院大学

大正大学

NPO法人日本スピリチュアルケアワーカー協会

上智大学臨床宗教師養成プログラム

となる。

伝統教団の多くがその学びの場を教師資格取得者へ向けて提供していることが分かるが、今報告では教師資格取得の為の教育プログラムに、必修または選択科目として、公共空間で心のケアを提供する宗教者の基本となる「グリーンケア（悲嘆ケア）」や「傾聴」を取り入れている例を挙げ、前報告を補いたい。

「中外日報」（令和元年七月三十一日号）では、真宗大谷派が定例の記者説明会で、グリーンケア研修を必修化する「仏教界初」の取り組みを紹介したと報じている。

現行の教師資格取得課程は教義・教学の座学が中心。グリーンケア研修の導入は現代の社会情勢を踏まえ、葬儀や法事などの現場で悲嘆（グリーンフ）を抱えた人々の苦に向き合う力を養うことを目的としている。

具体的にはグリーンケアに関する諸事業を展開するリヴオン（東京都荒川区）と提携。宗内十二の僧侶教育機関のうち、四月から九州大谷短期大と名古屋真宗学院で研修を試験的に先行導入、リヴオンの講師が両校に出向して基礎知識の講義やワークショップなどの実践的な学びを行っている。

来年はグリーンケア研修を宗派独自で開講できるよう講師の養成にも着手し、二〇二二年から全十二校での本格導入を目指している。

という。また「文化時報」（令和元年八月二日号）では、真宗大谷派教育部長の説明も載せ、

「大切な人を亡くした時に最初に出会うのは僧侶。遺族の不安に、僧侶がきちんと向き合っていたのかと自問した時、これまでの大谷派の教師養成プログラムは座学中心だった。遺族を支える家族構成、地域関係も変化している中で、僧侶が果たすべき役割にきちんと向き合い確立していきたいと、リヴオンと協働して取り組むこととなった」

と自省を踏まえて、導入の経緯を説明している。

リヴオンとは、グリーンフサポートが当たり前にある社会を目指して、二〇〇九年より任意団体として活動をはじめ、自死遺児支援や寺院と協働したグリーンフサポート連続講座等を行い、二〇一一年に一般社団法人となっている。僧侶のためのグリーンフケア連続講座もすでに名古屋・東京・北海道・静岡で開催し、各回好評を得ている。

前述の「文化時報」では、受講生から「すぐに現場に向かわなければならぬ中で、このような学びが欲しかった」、「人と話す姿勢、聴く姿勢が大きく変わった」との感想も伝えている。

他者のグリーンフ（悲嘆）に向き合う姿勢とはどのようなものか、リヴオンでは、

死別を経験すると心がしんどくなったり、病気をしたり、家族がばらばらになったり、お金がなくなつて中退

しそうになったり……。

あらゆる問題をいっぺんに抱えます。

からまった問題を丁寧にはぐしていき、一緒に考える。その人が自分の人生を生きていくところまで。そんな支えが、グリーンフサポートだと思えます。

そして、ただ支えるだけでなく「エンパワメント」に。

その人の中にすでにある回復力や希望を生み出すための、つながりと場を、提供できればと、リヴオンは願いながら活動しています。

とホームページ上で示している。また、同ホームページではグリーンフ（悲嘆）についても、

「グリーンフ」は大切な人、ものなどを失うことによって生じる、その人なりの自然な反応、状態、プロセスのことです。

どんな感情も反応もおかしなものではありません。

怒りも、悲しみも、時に安堵さえも失ったときに感じるのは自然なものです。あなたの感じる「ままに」大切に感じてみることははじめてみませんか。

グリーンフはそこから乗り越えるものとか立ち直るものではなく、抱きながら歩むものとして見られるとすこし楽になるかもしれません。

と説明している。「からまった問題を丁寧にはぐしていき、一緒に考える」、「その人の中にすでにある回復力や希

望を生み出すための、つながりと場を、提供、「あなたの感じる「ままに」大切に感じてみる」など、悲嘆を抱える方の立場に立って、焦ることなくその方のペースでゆっくりと聴いていく傾聴の姿勢が特徴的と言える。ただその方の言葉を聞くのではなく、このように聴いていくことは、大変難しいことでもある。

臨済宗妙心寺派では、花園大学に設置された妙心寺派僧侶養成課程において「傾聴基礎講座」を同派僧侶・寺族を対象に開講したことが「文化時報」（令和元年五月十一日号）で報じられている。

傾聴とは答えを出すのではなく、相手の言葉を受け止めることが大切だと説明し、「自分の考えを伝えると説教になる。言葉を映し返すことで、相手が自分を見つめ直すことができる」と話した。講義後、橋本教授は「僧侶の修行に『傾聴』を入れてほしい。聴くためには相手と同じ目線で話すことが大切。師弟の立場ではなかなか難しい」と傾聴を学ぶ必要性を述べた。（中略）「傾聴は僧侶が答えを出してあげることではなく、応えること。相手が自分から悩みの答えを出せるように導く」と傾聴の本質について説明。講義の終わりに「スキルにとらわれていると傾聴の本質を忘れてしまう。相手の苦しみを和らげることが大切」と語った。

教義・教学を中心に学ぶことは一宗派として当然のことであるが、それはある意味ではマニュアル的な対応を生み出す土壌ともなり得るのかもしれない、相手の言葉を聞いて、教義・教学にのみ照らし合わせて答えを出すことは、相手からしてみれば、自身の悩みや悲嘆を受け止めてもらえなかった、応えてもらえなかったと感じてしまうのかもしれない。誰しも、一方的に説教をされるだけならば、また話を聞いてもらいたいとは思わないのが普通であろう。

少なくとも前述した宗派は、これまでの教師養成のあり方を踏まえつつ、悲嘆を抱えた方への接し方、「グリーフケア」や「傾聴」といった寄り添う姿勢を必要な学びと捉えて、その教育課程に加えている。

上述した状況は、日本の主要伝統仏教宗派のほとんどが、大学院教育や教師養成課程において、宗教者が悲嘆を抱える方への寄り添う姿勢について学ぶ機会を提供していることが分かる。

日蓮宗の宗門大学である立正大学や身延山大学でも、僧階を得るための取得単位として「仏教カウンセリング」や「仏教デス・エデュケーション」などの科目があり、カウンセリングの基本姿勢である「傾聴」や、「死生観」などを扱った講義に触れる機会が提供されている。

それでも、「グリーフケア」や「傾聴」に特化して、講義中心ではなく、双方向の学びとなるワークショップなどの実践的な学びを行うことは、「仏教界初」と言えるのかもしれない。

教区教化研究会においては、令和元年度の中四国教区教研において「僧侶にできる「グリーフサポート」を考える」のテーマのもと、一般社団法人リヴオン理事の水口陽子氏が招かれ検討された。千葉教区教研においては、「宗教の未来と可能性／多様化する価値観の中で」のテーマのもと、東北大学臨床宗教師研修了者の出島元寿師が招かれ、講義「臨床宗教師の対応」や、ロールプレイ・模擬相談を用いた「対応の実践」が研修された。

また、平成三十年度には、京浜教区教研において「日本人の死生観—いま、わたしたちは生老病死にどう向き合うのか—」のテーマのもと、京都大学大学院政策のための科学ユニット特任教授のカルル・ベッカー氏が講義「日本人の死生観と佛教的ターミナルケア」を行い、分散会で検討された。九州教区教研においては、「老・病・死を考える」のテーマのもと、分科会の提言者として東北大学臨床宗教師研修了者の鴛海奉守師が招かれ「臨床宗教師の資格と

活動について」が提言され、検討された。直近の二年間を概観しただけでも、以上のような検討が様々な教区にて行われており、本宗教師からの関心もあることが分かる。

「傾聴」の姿勢について、布教的な立場からの批判も少なからずあることが考えられる。様々な反響や社会的な要請があることをこれまで見てきたが、「臨床宗教師」などの成り立ちや、養成のあり方などを見ていく中で、それらの検討も加えていくことが今後の課題と考える。